

Tag Question 再考

櫻井美智子

0. はじめに

Main sentence のあとに並列的に付加され、auxiliary—anomalous finite—と subject だけからなる簡単な question を tag-question という。Tag-question は通常会話体の sentence に添えられ、その intonation の形式と相俟って speaker の態度・意図・感情・確信の度合等を示すが、本稿では先づ統語論的分析をこころみ、そのあと intonation のタイプが統語上のパターンと組合わされる実際の運用面での機能を考察する。

今回は 1950 年以降の英・米・豪の児童文学作品 15 篇¹⁾から tag-question の文例 302 例を各 context ごと収集し、各文例を統語的パターンに分類したあと、それぞれの context における intonation contour を 1 例毎に画き、そのタイプに従って再分類した。そして再分類されたタイプ別に統語的特徴、機能、用法を考察しようとするものである。intonation contour の決定については、context を含む文例カードを各 3 コピーずつ作り、英語教育・英語学それぞれの分野で MA をもつイギリス人男性インフォーマント 2 人、社会学で MA 取得のイギリス人女性 1 人に 1 セットずつ渡して、context における tone contour を記入して貰った。インフォーマントをイギリス人にしたのは、アメリカ英語よりイギリス英語の方が日常の言語表現に社会的配慮がなされることが多いと考えたからである。2 人对 1 人と対照的に男性 1 人のインフォーマントによる intonation の相違が多少観察されたが、時をおいて再度相違のた文例を両者にチェックし内省して貰ったところ、異型を示したインフォーマントの確信がくずれては来たが訂正はしなかった。

収集した 302 例を先づ polarity について分類すると、

	Main S.	Tag	収集文例数	
Reversed polarity	Positive-Negative		184) 270
	Negative-Positive		86	
Constant polarity	Positive-Positive		32	
	Negative-Negative		0	

となり、圧倒的に reversed polarity の文例が多く、Pos-Neg という結合のタイプは Neg-Pos, Pos-Pos, Neg-Neg のものよりはるかに頻度が高い。また調査対象例の中には Neg-Neg は 1 例もなかった²⁾。これに tag の intonation タイプによる分類を加えると次のようになる。

	Main S.	Tag	Intonation	文例数	全文例数に対する割合
i	Positive-Negative		Rising	21) 15.23%
ii	Negative-Positive		Rising	26	
iii	Positive-Negative		Falling	163) 73.84%
iv	Negative-Positive		Falling	60	
v	Positive-Positive		Rising	32(18*)	10.6%
vi	Negative-Negative		Rising	0	
vii	Positive-Positive		Falling	0(14*)	
viii	Negative-Negative		Falling	0	
				302	

以上の分布を使用頻度の高い方からみると、reversed polarity の falling の場合 (iii と iv) が 223 例あり全体の 73.84% をしめ、同じ reversed polarity の rising の場合 (i と ii) は 47 例で 15.23% であるのに対し、constant ploarity は全体で 32 例、10.60% であり、idiolect とした 14 例を配慮に入れても rising の場合の方が多い。

* Positive-Positive の 32 例のうち、14 文例についてインフォーマント 3 人の間で 2:1 で intonation が分かれた。この 14 文例を falling であるとした 1 人のインフォーマントは、慎重で内省的懐疑的な彼自身の性格を context の解釈に反映させた結果と思われるので、ここではカッコ内に入れ、idiolect として扱うことにする。(因みに、O'Conner (1955: p. 102), Cruttenden (1986: p. 106) は constant polarity の falling tone はありえないと述べている。)

1. 統語的考察

1.1 表層構造での特徴

1) Tag の auxiliary は先行の main sentence に auxiliary が含まれていれば同じ auxiliary を, 一般動詞の場合は *do* を, その main verb の tense, number と一致する形 (*do, does*, 又は *did* という形) にして用い, 2) tag の subject は pronoun でなければならない. Main sentence の subject が pronoun ならばそれを繰返し, noun ならばその person, number, gender と一致する同一指示の pronoun を使う.

- (1) Charlie left yesterday, didn't he? (CCF)
- (2) Charlie didn't leave yesterday, did he?
- (3) Charlie left yesterday, did he?
- (4) Charlie didn't leave yesterday, didn't he?
- (5) Come here, won't you?
- (6) Come here, will you?

上の例の (1) と (5) のように tag が negative で main sentence が positive, (2) のように tag が positive で main sentence が negative の場合, これを reversed polarity tag といい, 又 (3), (4), (6) におけるように tag が main sentence と同じ polarity の場合 constant (direct ともいう) polarity tag という (前頁参照).

尚 tag が否定形になった場合, *not* が縮約され auxiliary と共に subject の前におかれることが多く ((1), (4), (5)), 縮約されない場合は次の例にみるように subject の後におかれる.

- You have come for your chocolate bars, have you *not*?

(TW: p. 99, ll. 15-16)

Main sentence の否定辞としては *not* だけでなく, *nor, never, scarcely, hardly, seldom, only, 'no+N'* なども現われ, このような場合 tag は positive である.

- Nor has Cousin Fred, has he? (HE: p. 19, l. 3)
- You *never* listen to me, do you? (TI: p. 113, l. 2)
- I could *hardly* joined in the fight, could I? (HE: p. 73, l. 4)

- We *only* played there for a few minutes, did we, Lucy?

(Kruisinga (1931) II. p. 299)

- I mean, *nobody* can do anything to him, can they? (GTK: p. 70, l. 32)

Tag-question が許されない場合がある。Main sentence の subject が *I* で verb が present tense であり, predicate が主観的感情を表わすもの, 又 performative verb である場合である。

- * I prefer going out, don't I?

- * I promise to pass the exam, don't I?

Main sentence が 2 つ以上の clause から成立っている場合, 一般に tag-question は embedded clause にはつかず main clause につくが, subject が *I* で verb が次に示すグループの中のもので present tense の場合のみ embedded clause につくことができる。

appear, seem, be likely, be sure; believe, expect, fancy, guess, imagine, intend, know, notice, see, suppose, think, understand, want.

- It seems to me that this machine needs repair, doesn't it?

- I am sure that's right, isn't it?

- I know that it's very important, isn't it?

- I suppose John's gone, hasn't he?

この場合 main clause に tag がつくことはできない。

- * I am sure that's right, ain't I?

- * I know that it's very important, don't I?

これらの predicate は Neg-transportation の適用を受けるので, complement に現われている否定辞は main clause に繰上げられる。従って main clause に否定辞がある場合 subordinate の *that*-clause は negation の scope 内にあり, tag は positive となる。

- I think that it isn't important, is it?

- I don't think that it is important, is it?

しかし同じ performative verb の中でも *advocate, demand, name, promise, propose, suggest* 等は tag question を全くとらない。

1.2 Declarative sentence+tag-question の深層構造

Tag-question の深層構造についてはいろいろな意見がこれまであったが、大きく分けて3つの異なるモデルがあったといえる。即ち1つは基底部に simple sentence を仮定するもの、次は complex sentence、もう1つは compound sentence である。第1の説を唱えたのは Klima (1964), Arbini (1969), Burt (1971) らであり、Stockwell *et al.* (1973) は complex sentence を、Bolinger (1967), Huddleston (1970) らは compound sentence をおくことを示唆しているが実際に例示することはなかった。しかし Sadock (1971), 中島 (1978) らが compound sentence から tag-question を派生させている。以下この3つのモデルを紹介するが、1つの共通の特徴は、いずれも深層構造について reversed polarity と constant polarity の tag-question のちがいははっきりと説明していないことである。

1.2.1 Klima (1964) らは次に示すような図式で reversed polarity の declarative の場合 ((3)–(6) の場合を除く (1) と (2) の場合) を、基本的に interrogative sentence と同じ構造で分析している。

Tag Question Formation (optional)

(Klima (1964): Eq. 54a, p. 264)

$$(7) \quad \underbrace{\text{wh}}_1 [\underbrace{\text{Nominal}}_3 \text{-} \underbrace{\text{X}}_4 \text{-} \underbrace{\text{aux}^1}_5 \underbrace{(\text{aux})^2}_{\text{seg}_2} \text{MV}]$$

$$\implies$$

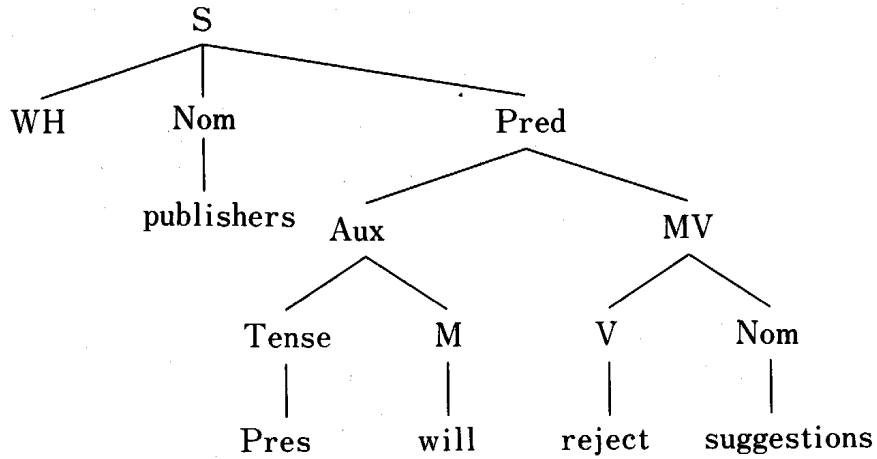
$$\text{seg}_2 \text{-} \underbrace{\text{wh}}_1 \text{-} \text{pro} + \underbrace{\text{Nominal}}_3 \text{-} \underbrace{\text{aux}^1}_{\text{not}}_5$$

(where *not* is absent from the resulting tag if X in the source contains a negative pre-verb)

これを Klima が引いている例文を用いて樹状図にすると

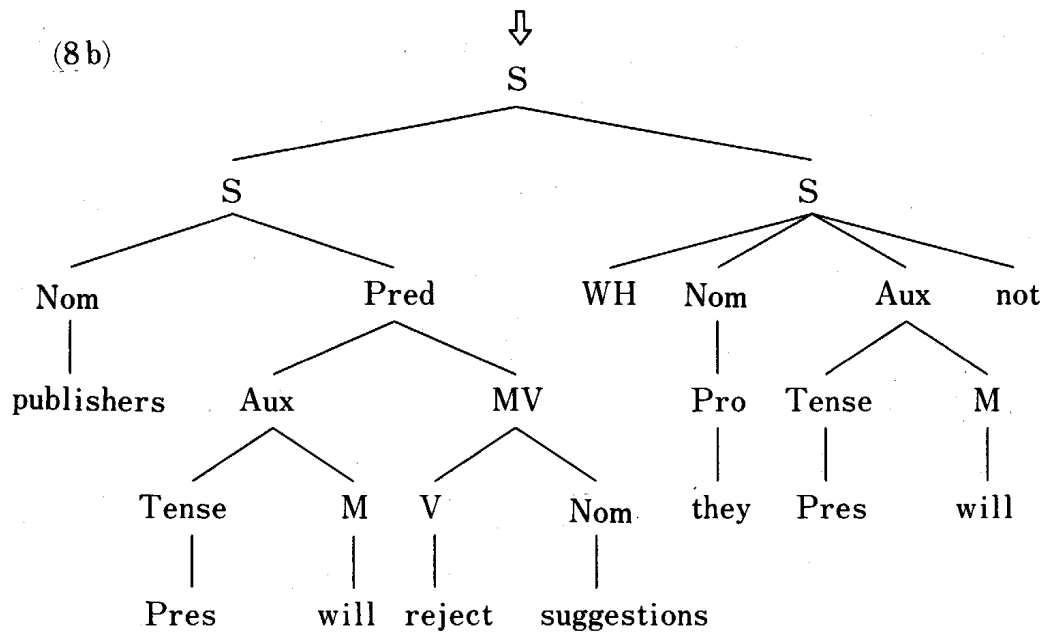
(8) Publishers will reject suggestions, won't they?

(8 a)



いくつかの optional transformation rules を経て

(8 b)



となり、その後 *not* に contraction rule, tag に inversion rule をかけて表層構造となる。Subject と auxiliary を copying rule で右側に copy して tag を形成している。

Huddleston (1970) はこの分析に対して simplicity という点で魅力的だが次のような embedded sentence の tagging を説明することができないと指摘している。

- (9) I suppose John's gone, hasn't he?
(10) I think it's worth it, isn't it?

(いづれも Huddleston (1970): p. 216)

確かに (9) における *John's gone, hasn't he?* を *Has John gone?/Whether John has gone* からひきだすことは、main sentence の *suppose* が complement として interrogative sentence をとらないので具合が悪い。(10) の *think* は interrogative complement をとる verb であるが、*I think whether it's worth it* という意味ではなく、'thinking that' と 'thinking whether' とは全く別のことである。

Copying の対象となる subject は必ずしも深層構造の subject と一致せず派生過程の途中で生じた subject である場合があるが (Passive, *there*-insertion 等によって), Burt らは基底に Pre-sentence として Q をおき、こういった rules を ordering で先行させ、そのあと Tag Formation をかけることによって解決している。

Emonds (1976) は declarative の simple sentence を仮定し copying と deletion の rules を用いた。次の declarative sentence (11a) と tag-question (11b) とは同じ深層構造から派生したと考えられるが、(11b) は ungrammatical であり、この説明がつかない。

- (11a) I am exhausted.
(11b) *I am exhausted, ain't I?

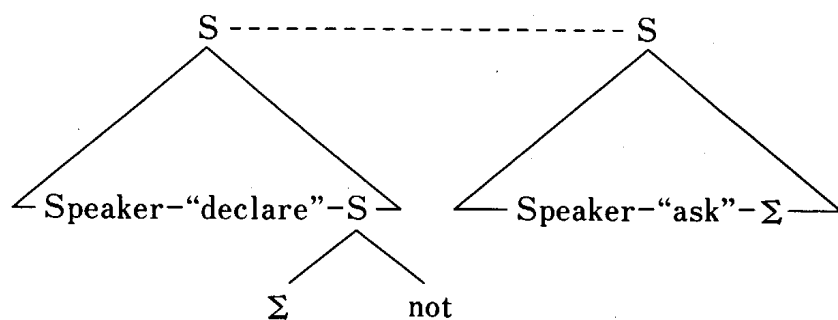
1.2.2 Stockwell *et al.* (1973) は 2 つの approach を紹介している。その 1 つは copying rule と Negation を使って tag を生じさせる方法であるが、この方法は前述の批判のうえに種々難点があるので、ここではもう 1 つの方法を取上げる。それは statement+alternative question の clause という complex sentence を深層構造におく提案である。即ち、*John has left, hasn't he?* を次のように分析する。

(Stockwell *et al.* (1973): p. 622)

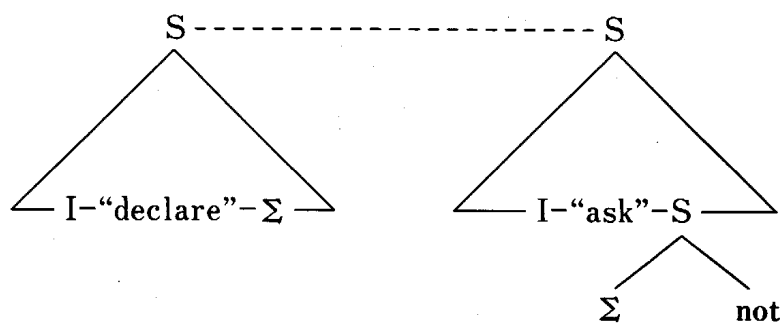
している。Reversed polarity の tag-question は speaker の proposition とともに 1 つ以上の intention を表層構造で表わすことを可能にするのであるから、2 つの parts から成立していると考えられる。Speaker の intentions は、例えば誰かに X ということを語り、彼に X が true であるかどうかを尋ね、彼に X が true であることの同意を求める。しかし、tag-question のこの 2 つの parts は深層構造と同時的であり、表層構造で statement と question が相続いて 1 つの proposition で同時に表現されると考えると、深層構造で 2 つの S を仮定し、1 つを subordinate ではなく、並列的に coordinate と仮定する方が統語的に無理がないように思われる。

1.2.3 Sadock (1971) は、Stockwell らが構造的に subordinate としたものを assertion と question が等しい並列的序列で連結されていると考えた。この考え方ならば、performative をもつ higher S の中に embed された場合でも説明可能である。

(13a) positive tag の場合



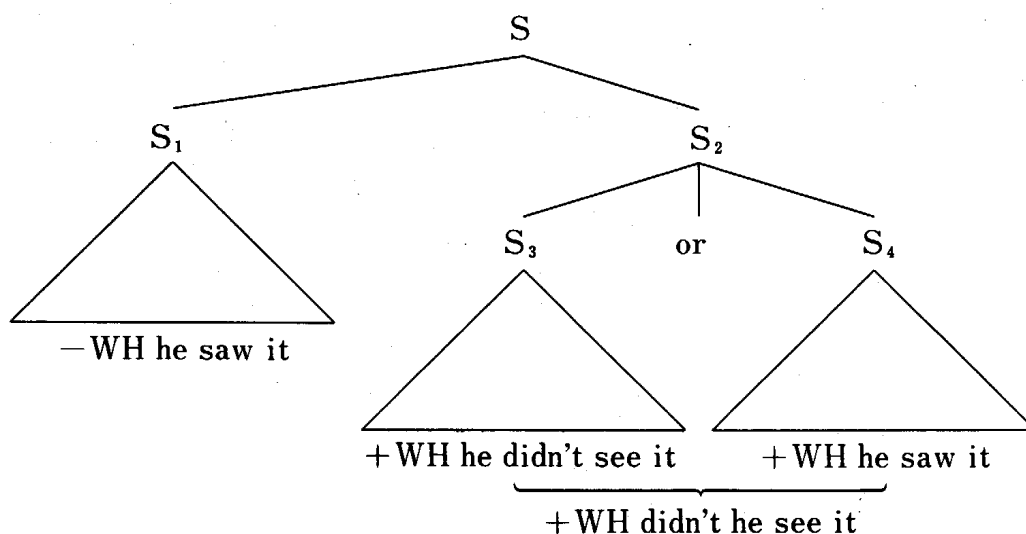
(13b) negative tag の場合



これを更に中島 (1978) らは構文的に declarative sentence と alternative question とから成る compound sentence として次のように明示した。

(14) He saw it, didn't he?

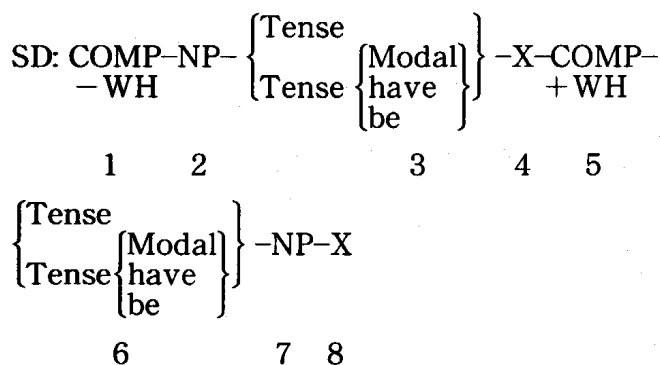
(中島(1973): (278) p. 175)



S₁ は statement の基底形, S₂ は tag-question の基底形である. S₂ は S 以外の如何なる node にも支配されていないので, subject NP と Aux の倒置が可能であり, whether の挿入を受けることがない. それ故 S₂ に alternative question の派生に関連する rules を適用し, 次に示す Tag Question Formation Rule を設ける.

(15) 付加節形成規則(義務的)

(*op. cit* (279) p. 176)



⇒

SC: 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, ϕ

条件 1: 2=7, 3=6, 4=8

2: $\widehat{234}$ が Neg を支配するならば, 6 または 8 が Neg を支配しない; $\widehat{234}$ が Neg を支配しなければ, 6 または 8 が Neg を支配する.

この2つの条件でかなりきっちり制約され, その派生過程を想定すると今まで指摘された難点が解決されている. Statement に hardly, scarcely 等が現

われても文法的な tag が生成され、tag の基底形を alternative question にしたことで通常の yes/no question と同じ条件が与えられ、Subject が *I* で Present tense の主観的精神状態を表わす predicate の tag-question が許されないのは、同じ条件で yes/no question も許されないということで当然となる。その他否定辞のおかれる位置も yes/no question の場合と一致している。

以上は reversed polarity で、main sentence が declarative で intonation が文末で falling になり tag で rising となる場合である。

1.2.4 Tag が falling になる場合は、speaker が statement の内容に同意を求めたり、確めたりするのであるから、深層構造の compound sentence は declarative+rhetorical question を想定するが、構造的には rising の場合の tag と同じ alternative question の形をとり、表層の intonation で falling を指定する。

1.3 Imperative sentence+tag-question の深層構造

Arbini (1969) は imperative の positive requests/invitations には *will* 又は *won't* がつくが、negative requests/invitations の時は如何なる tag もおこらない、と述べている。しかし実際には negative requests/invitations の場合、positive tag に限ってつくことが可能であり *will* 以外の auxiliaries をとることもできる。

Declarative sentence につく tag-question の派生のしかたと同様に imperative の場合も深層構造を simplex と考える案と duplex と考える案がある。

1.3.1 Klima (1964), Burt (1971) らの提案した copying rule を応用し、main sentence の subject と auxiliary を main sentence (imperative) の右側へ copy する案がある。

(16) SD: Imp- $\left\{\begin{array}{c} \text{Neg} \\ \phi \end{array}\right\}$ -you-will-VP
 1 2 3 4 5

⇒

SC: 1, 2, 3, 4, 5, 4+ $\left\{\begin{array}{c} \phi \\ \left\{\begin{array}{c} \text{Neg} \\ \phi \end{array}\right\} \\ \phi \end{array}\right\}$ 3

ここでは Aux の部分に modal の *will* が含まれていると仮定し, copy されるとき tag に *will* が現われると考えているが, 実際には Stockwell *et al.* (1973: p. 639) にあるように *will/would/won't/can/could/can't* が tag に現われる.

- "Keep your head up, won't you?" (*J.*: p. 194, l. 10)
- Take the scissor, can't you? (*T.B.*: p. 17, l. 3)

それで (16) を次のように修正してみよう.

(16)' SD: Imp- $\left\{\begin{array}{c} \phi \\ \text{Neg} \end{array}\right\}$ -you $\left\{\begin{array}{c} \text{will} \\ \text{can} \end{array}\right\}$ (past)-VP
 1 2 3 4 5

⇒

SC: 1, 2, 3, 4, 5, 4+ $\left(\left\{\begin{array}{c} \left\{\begin{array}{c} \text{Neg} \\ \phi \end{array}\right\} \\ \phi \end{array}\right\}\right)$ 3

条件: 2 = ϕ , 4 = $\left\{\begin{array}{c} \text{will} \\ \text{can} \end{array}\right\}$ past の場合, tag は 4 = $\left\{\begin{array}{c} \text{will} \\ \text{can} \end{array}\right\}$ past のみ可能

2 = Neg の場合, tag は 4 = $\left\{\begin{array}{c} \text{will} \\ \text{can} \end{array}\right\}$ + ϕ

この案に従って 1.1 に挙げた例文 (5) (6) について考察すると

- (17) a Come here, will you?
 b Come here, won't you?
 c Come here, would you?
 d Don't come here, will you?
 e * Don't come here, won't you?
 f ? Don't come here, would you?

(17) e の ungrammaticality はその tag の基底にある interrogative **won't you (please) not come here* の ungrammaticality に起因すると思われる.

Will you not come here はその intonation によって「来てはいけない」とい

う request なのか「いらっしゃい」という invitation なのか区別されるが, *not* の前に *please* を入れると歴然として negative request である. *Won't you come here* は *come here* の invitation に過ぎないので negative request の *not* が *won't* に併合されることはありえない. Positive imperative につく tag は positive でも, past でなければ negative でも可能であるのに対し, negative imperative の場合は上記の理由で tag は positive に限られ, (16)' の条件が必要となる.

1.3.2 第2の方法は基底部に compound sentence を想定し, main sentence と identical な項目, 即ち VP を delete する案である.

$$\begin{array}{cccccc}
 (18) \text{ SD: Imp-you-VP}_i - \left\{ \begin{array}{l} \text{will} \\ \text{can} \end{array} \right\} \left(\left\{ \begin{array}{l} \text{not} \\ \text{Past} \end{array} \right\} \right) - \text{you-VP}_i & & & & & \\
 \quad \quad \quad 1 \quad 2 \quad 3 \quad \quad 4 \quad \quad \quad 5 \quad 6 & & & & & \\
 & & & & & \implies \\
 \text{SC: } 1 \quad 2 \quad 3 \quad \quad 4 \quad \quad \quad 5 \quad \phi & & & & &
 \end{array}$$

この案に従って (17) e の深層構造を考えると

[Neg Imp you come here][will not you come here]

となり, ungrammatical で out となる. 深層構造が simple sentence の場合は, これを避けるために条件でいろいろ規定しなければならなかったが, compound sentence にすると記述がずっと simple になる.

又 1st person plural imperative に *shall we* tag が付加される場合も compound sentence を基底部に設定することで説明でき, この場合は main sentence の polarity がどうあろうと tag は常に *shall we* である.

- (19) a Let's go for a walk, shall we?
 b* Let's go for a walk, shan't we?
 c Let's not/don't let's go for a walk, shall we?
 d* Let's not/don't let's go for a walk, shan't we?

2. Tag-question の intonation タイプ

通常 nuclear tone は tag の auxiliary にあり, rising の場合と falling の場合がある. 概括的にいって, speaker の断定の気持が強く働く時は fall-

ing であり、質問の気持ちが強く働く時は rising ということができよう。Speaker が発言に対して抱く確信度の差で両型の選択がなされるともいえるが、もう少し詳しく考察してみたい。

Kruisinga (1931) は reversed polarity の tag-question を Confirmative question, constant polarity のものを Sympathetic question と名付け、前者を “serving to invite the person addressed to express his agreement with the statement” と解説し、後者については “The construction may express a friendly interest or surprise, it may also be ironical” と考察しながら、こういった feelings は context と主に intonation によって示されると述べている。

H. E. Palmer (1939, 2nd ed.) は Kruisinga が Sympathetic と呼んだタイプを Commentative と名づけた。そして2種の questions を更に tone-type で次のようにその意図を区別した。

Confirmative question (1939: § 584, p. 265)

- a. To request confirmation of a statement—high rising
- b. To challenge refutation of a statement—falling nucleus-tone

Commentative question. (*op. cit.* § 587, p. 267)

- a. The high-rising nucleus-tone may express polite interest, doubt or puzzled wonderment.
- b. The falling nucleus-tone may express surprise, intense interest or irony.

Cruttenden (1986) は reversed polarity の tag-question は典型的に high-falling か low-rising の tone になるとして、例を次のように示した。

(1986: 4.4 p. 97)

- a. He isn't òoming/is he?
- b. He isn't òoming/is he?

Intonation のちがうこの2つの tags a・b の意味は異なる。即ち2つとも “no” の答を期待しているが、a の falling intonation の方が b の rising intona-

tion よりもその期待度がずっと高い, といっている. Falling のものには “yes” の可能性がほんの僅かしか許容されないが, rising ではその可能性の許容は遙に高い. High-fall は ‘demanding’ であり, low-rise は ‘doubtful’ である, ともつけ加えている.

しかし O’Conner (1955) がかなり詳しい考察をしているので, ここでは彼の意見を中心に Cruttenden (1986) の意見を参考にしながら, intonation のもつ役割をタイプ別に検討する.

2.1 Reversed polarity の tag-question が falling の場合

2.1.1 Falling statement-falling question の場合

“an invitation to confirm the speaker’s positive assertion”³⁾ なので confirmative と呼ぶのが適当であり, この question に対し確認以外の答をしたら相当な驚きになる.

(以下の例文では Nucleus を capital letter で表わす)

- Seeing we’re going to be under the same roof we might as well be PALS,
MIGHTN’T we? (TI: p. 15, ll. 17-19)
- Then you’ve got a PRÒBLEM, HÀVEN’T you? (TW: p. 122, l. 20)
- But there must be a BÒGGIS, MÙSTN’T there? (CGK: p. 118, l. 22)
- I mean, nobody can do anything to HÌM, CÀN they? (GTK: p. 70, l. 33)
- I won’t be able to tell ÀNYONE, though, WÌLL I? (HE: p. 149, l. 32)

2.1.2 Rising statement-falling question の場合

Statement の上がり方に low と high の場合が観察され, tag の tone の fall のしかたがそれによって異なる. しかし実際には high fall, low fall のいずれも confirmation 又は support を訴えているのであるが, low fall は “introduces a coaxing, confidential note that is absent from the high fall—as though the speaker were trying very kindly to get an admission from the listener, perhaps for the listener’s own good”⁴⁾ であり, 子供に向かって話す時に度々使われるパターンとされている (大人に対しては high fall がふさわしい).

- You do have an interesting NÁME, DÒN'T you? (CCE: p. 69, ll. 3-4)
- You won't FORGÉT, WÌLL you, Bert? (GTK: p. 119, l. 27)
- He'd do it just for FÚN, WÒULDN'T you, Pot? (TB: p. 36, l. 3)
- It's a lovely CÁR, ÌSN'T it? (HE: p. 41, l. 27)

2.2 Reversed polarity の tag-question が rising の場合

2.2.1 Falling statement-rising question の場合

Question の上がり方が low の時と high の時がある。Low の場合は falling statement で伝えられた断言が非常に和らげられるが、speaker は confirmatory answer をなお期待している。High rise の場合 statement と question の間に pause をおくことが多く、両者間に分離があり、speaker が急に疑をもち始めていることを示す。従って、low rise の場合 positiveness と doubt の要素の mixture を意味しているのに対し、high rise のパターンでは question が statement にとってかわっていることを意味する。

- James said, "You don't believe he's a GHÒST, DÓ you? (GTK: p. 39, l. 9)
- "Well, it's a CÈMETERY, ÍSN'T it? (J: p. 138, l. 3)
- You don't feel SÈEDY, DÓ you? (TB: p. 91, l. 14)
- There's nothing between you and WÌLL, ÍS there? (F: p. 217, l. 14)

2.2.2 Rising statement-rising question の場合

2つの rising という intonation の分離に反映される思考の分離があることは明らかである。Low prehead と rising nucleus のある statement は "a form of protest, calling upon the listner to revise his opinion"⁵⁾ であるが、rising tag が free opinion を求める限り uncertainty を表わしているわけで、結局 "a compound rather than a succession of protest and uncertainty"⁶⁾ ということになる。

- You don't think I live on cacao BÉANS, DÓ you? (CCF: p. 124, ll. 1-2)
- "You're not RÍCH, ÁRE you?" inquired Celia.

Ril thought of her father's leather-patched jackets and the decrepit car

Daisy.

"No such luck," she said.

(HE: p. 84, ll. 3-6)

- "Dick should have thought of all this before he was so stupid. Anyone would have sacked him for what he did, you don't expect me to take him BÁCK, DÓ you?"

"Can't you find him another job? Or give him some decent reference?"

(F: p. 152, ll. 1-5)

2.3 Constant polarity の tag-question が rising の場合

2.3.1 Falling statement-rising question の場合

同じパターンの reversed polarity の場合 (2.2.1) とのちがいは context の中にある。このパターンの reversed polarity の tag-question がひきだそうとするものは、まさに listener の見解であるのに対し、constant polarity の tag-question では listener によって既に確立された事実を再び取上げて問題にしておしていることである。

- So people should deliver their òwn letters nowadays, shóuld they?
(PGA: p. 42, l. 12)
- You think it's a jòke, dó you? (CCF: p. 84, l. 30)
- "Oh", said Dad, "A lòcal man, ís he? Perhaps he can show us around. I got lost coming back from the garage today when I went for petrol."
(TL: p. 46, ll. 1-3)
- "What on earth are you talking about, Lucy?" asked Susan.
"Why?" said Lucy in amazement, "haven't you all been wondering where I was?"
"So you've been hìding, have you?" said Peter. (LW: p. 27, ll. 1-8)

この型の場合、会話の相手が既に言ったことのエコーともいうべき、Palmer のいう commentative question であって、このことを裏付けるのに *so* とか *oh* が先行することが多い。既に述べられたことを思い出すことによって、又は推論によって speaker が結論に達したことを示している。この種の tag は先行の tone unit の一部となって nucleus がないこともある。叱責とか皮肉

をこめた矛盾する言葉であったりする。

2.3.2 Rising statement がそのまま tail を引いた形 (rise) で tag になる場合

Rising statement-rising question という reversed polarity の場合 (2.2.2) に statement と question の間に分離があるのに対し, constant polarity の場合は statement の rising intonation をそのまま受けついで rise し, statement の questioning intonation (rising) を言葉で補足あるいは強化する機能をもっている。Speech によく現われるパターンである。

• “I’m telling you to go in the visitor’s room. That’s your place. The kitchen’s mine, and you can keep out of it.”

“Oh, so the kitchen’s YÓURS, ÍS IT?” the stranger said. His voice took on its sharp edge. (TI: p. 59, ll. 25–29)

• “And you’re CÉRTAIN, ÁRE YOU? Arnold? Positive? That he’s not really a nephew?”

“Yes, I’m sure. He was lying. He was lying all the time…….”

(TI: p. 72, ll. 17–19)

• You haven’t FÍNISHED, HÁVEN’T YOU? (Huddleston (1970): p. 221)

• You’re not GÓING, ÁREN’T YOU? (O’Conner (1955): p. 102)

• He hasn’t TÍRED, HÁSN’T HE? (Palmer, E. R. (1968): p. 41)

上の例で見ると、同じ positive あるいは negative の rising の tag によって先行の statement は強められ、不信・皮肉・からかい・驚きなどの意味をこめる。

2.4 Constant polarity の tag-question が falling の場合

Falling statement-rising question の場合に reversed polarity では listener の見解をひきだそうとするのに対し, constant polarity の同じタイプは listener によって既に確立された事実を再び取上げて問題にする, と 2.3.1 で述べた。Background のこのちがいが falling-falling の型が constant polarity では非常に稀であることを示している, と O’Conner は述べている。⁷⁾

Cruttenden は

(1986: p. 106)

a You're going/àre you?

b* You're going/àre you?

の例を示して、a については“often with a menacing overtone”で使われるが、b のような falling tone は起らないとしている。その理由は、既に適切な情報が前の speaker (即ち今の listener) によって明白に与えられ、もしくは暗示されているような状況で、このような tag が使われるからである。つまり falling tone は listener からの agreement を要求するが、listener は既に自分で情報を提供しているのに agreement を要求されるということは語用論的にも妥当ではない。

2.5 Imperative に tag-question がつく場合

Imperatives のあとに来る tag には凡ての auxiliaries がおかれる可能性はなく、実際には、*will, would, can, could, shall, should, may, might* が使われ、この中で *will* が一番日常的に使われる。

2.5.1 Falling imperative-falling question の場合

このタイプは通常余り聞かれず、使われる auxiliaries も大抵 *will* で時折 *can't* が見受けられる。

• “STUFF it, Norman, WILL you? I'm not in the mood.” (HE: p. 100, l. 26)

• “For Pete's sake, Laura, COME up, WILL you? You'll burst.” (J: p. 79, l. 12)

• Groaning. “FORGET it, WILL you! Let's forget it.” (J: p. 96, l. 13)

• “Be QUIET, Homily, CAN'T you!” exclaimed Pod angrily. (TB: p. 132, l. 17)

これは依頼とか情報提供というより、“exclamatory device”であり、speaker にとってかなり憤慨・激怒という状況で聞かれる。

2.5.2 Falling imperative-rising question の場合

前項のタイプよりはるかに頻度が高く用いられ、特殊な含意もずっと少なく、2.5 に挙げた auxiliaries のどれでも tag に起ることが可能である。

• Put them somewhere COOL, WILL you? (TL: p. 157, l. 14)

• James, pass the Vicar his TÈA, WÌLL you? (GTK: p. 77, l. 1)

• Let's try and look forward to life in HÀLLERSAGE, SHÁLL we?

(HE: p. 13, l. 7)

• Let me have a LÒOK, MÁY I?

• Push HÂRDER, CÁN you?

(以上 2 例は O'Conner (1995): p. 103)

上の例文でも分るようにこのタイプの imperative は positive である。ということは rising の tag-question の前には negative imperative が現われないという O'Conner の説を裏付けている。またこのタイプの tag が negative の場合、auxiliaries は *will* と *can* の 2 種のみである。

• Take the SCÌSSOR, CÁN'T you? (TB: p. 16, l. 6)

• Keep your HEAD ÛP, WÓN'T you? (J: p. 194, l. 10)

Rising tone の positive tag-question は falling imperative の direct command を和らげ、命令を依頼のような形に変える役割をしている。Rising tone を伴った question 形式の依頼 (例えば *Would you pass the salt?*) と、そっけない falling imperative との中間的な形式といえるであろう。Won't, can't の否定の auxiliary を tag に使うと、もっと pressing な含意を帯びてくる。Won't の方が can't よりも一般的に使われる。

2.5.3 Rising imperative-falling question の場合

このタイプでは *will* と *won't* のみが現われ、他の auxiliaries があらわれることはない。

• Don't FORGÉT, WÌLL you?

• Come in TÍME, WÓN'T you?

これらは You won't FORGÉT, WÌLL you? (GTK: p. 119, l. 27)

You won't come in TÍME, WÌLL you?

の 2.1.2 の場合と呼応し、懇願する調子を帯びる。

2.5.4 Rising imperative-rising question の場合

2.2.2 の statement の場合で述べたように、2 つの rising という intona-

tion の分離に反映されて、全く分離したものが tag-question で考え直したものと結合したと考えられる。

- Do help MÉ, WÍLL you?
- Pass it ÓVER, CÁN you?

この型の使用頻度は低い。

3. おわりに

Tag-question についての前回の研究⁸⁾では、文例収集に *you-tag* や *echo-tag* を含めインフォーマントも 1 人だけという不備な点があった。それを修正する意味で、今回同じテーマを取上げ、収集例の分析だけにとどまらず、慎重に従来の文献を検討し、統語論とイントネーションの面から考察した。Spoken data を含めた研究と constant polarity の tag-questions の統語分析を今後に望みたい。

注

- 1) CGK Boston, L. M.: *The Children of Green Knowe* 1954
CCF Dahl, R.: *Charlie and the Chocolate Factory* 1964
TW Dahl, R.: *The Witches* 1983
HD Garnett, E.: *Holiday at the Dew Drop Inn* 1962
LW Lewis, C. S.: *The Lion, the Witch and the Wardrobe* 1950
MN Lewis, C. S.: *The Magician's Nephew* 1955
PGA Lindgren, A.: *Pippi Goes Abroad* 1956
GTK Lively, P.: *The Ghost of Thomas Kempe* 1973
TL Mark, J.: *Thunder and Lightnings* 1976
TB Norton, M.: *The Borrowers* 1952
DSS Pearce, P.: *A Dog So Small* 1962
F Peyton, K. M.: *Flambards* 1967
J Southall, I.: *Josh* 1971
HE Townsend, J. R.: *Hell's Edge* 1963
TI Townsend, J. R.: *The Intruder* 1969

(本文中の引用例文の頁・行数は Puffin Bks に拠る)

- 2) Neg-Neg の Constant Polarity の tag は稀であるが、次のような文例が紹介されている。

Jespersen (1909: § 496) "You can't catch me—I can't, can't I?" said Philip.
(Caine, Hall: *The Manxman* London 1984 p. 110)

Kruisinga (1931: p. 296) "Oh, oh! The bishop wouldn't like it—wouldn't he?"

(Trollope, A.: *Dr. Framley* p. 23)

Palmer, H. E. (1939: p. 586) "So he wouldn't come, wouldn't he?"

O'Conner (1955: p. 97) I'm nor good, aren't I?

Cattell (1973: p. 616) John: ...and Sue hasn't graduated yet.

Harry: She hasn't graduated yet, hasn't she?

Huddleston (1970: p. 221) "They're not leaving, aren't they?"

Hintika (1982: p. 130) "Your butcher didn't steal the whiskey, didn't he really?"

3) O'Conner, D. (1955) p. 98

4) O'Conner, D. (1955) p. 100

5) O'Conner, D. (1955) p. 101

6) O'Conner, D. (1955) p. 101

7) O'Conner, D. (1955) p. 102

8) 櫻井美智子 (1987) 'Tag question についての一考察' 東京女子大学紀要「論集」, 37-2, 71-86

参考文献

Akmajian, A. and Heny, F. (1975) *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax*. MIT Press.

Algeo, J. (1988) "The Tag Question in British English: It's Different, I'N'IT?". *English World-Wide*. 9: 2, 171-191.

Algeo, J. (1990) "It's a Myth, Innit? Politeness and the English Tag Question" In Christopher Riko & Leonard Michaels eds. *The State of the Language*. Univ. Calif. Press.

Allen, W. S. (1954) *Living English Speech*. Longman.

Arbini, R. (1969) "Tag-questions and tag-imperatives in English". *J. of Linguistics*, 5, 193-320.

Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*, 2nd ed. Harvard Univ. Press.
坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』大修館書店.

Bolinger, D. (1967) "The Imperative in English". *To Honor Norman Jakobson. Essays on the Occasion of His Seventieth Birthday* Vol. I, 335-362, The Hague: Mouton.

Burt, M. K. (1967) *From Deep to Surface Structure*. New York: Harper & Row.

Cattell, R. (1973) "Negative Transportation and Tag Questions". *Lg.*, 49, 612-639.

Cruttenden, A. (1986) *Intonation*. Cambridge Univ. Press.

Emonds, J. E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax. Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. Academic Press.

Hintikka, J. (1982) "Tag Questions and Grammatical Acceptability". *Nordic Journal of Linguistics*, 5, 129-132.

Huddleston, R. (1970) "Two approaches to the analysis of tags". *J. of Linguistics*, 6, 215-322.

Huddleston, R. (1984) *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge Univ. Press.

Hudson, R. A. (1975) "The Meaning of Question". *Lg.*, 51-1, 1-31.

- 今井邦彦・中島平三 (1978) 「文 II」現代の英文法 5. 研究社. 170-180.
- Jackendoff, R. S. (1971) "On some questionable arguments about quantifiers and negation". *Lg.*, 47, 282-297.
- Jespersen, O. (1909-1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles V*. London: Allen and Unwin.
- Katz, J. J. and P. M. Postal (1964) *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge, Mass. MIT Press.
- Kingdon, R. (1958) *The Groundwork of English Intonation*. Longmans.
- Klima, E. S. (1964) "Negation in English" In Fordor, J. A. & J. J. Katz eds. *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall. 263-265.
- Knowles, J. (1980) "The Tag as a Parenthetical". *Studies in Language*, 4-3, 379-409.
- Kruisinga, E. (1931) *A Handbook of Present-day English*. II-1 5th ed. Groningen: P. Noordhoff. § 425-§ 428, 294-298.
- 小西友七 (1964) 「新しい付加疑問」『現代英語文法の背景』. 研究社. 45-48.
- Nässlin, S. (1984) *The English Tag Question: A study of sentences containing Tags of the type isn't it?, is it?*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- O'Conner, J. D. (1955) "The Intonation of Tag Questions in English". *English Studies*, 36, 97-105.
- Palmer, F. R. (1965) *A Linguistic Study of the English Verb*. Longmans.
- Palmer, H. E. (1969) *A Grammar of Spoken English*, 2nd ed. reprinted. Revised by the author with the assistance of F. G. Blandford. Heffer-Cambridge/Maruzen.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Sadock, J. M. (1971) "Queclaratives". *Papers from the Regional Meetings of Chicago Linguistic Society*, 7, 223-232.
- Stockwell, R., P. Schachter and B. H. Partee (1973) *The Major Syntactic Structures of English*. Holt, Rinehart & Winston Inc. 232-233, 620-624, 656, 662-664.